



ハチの巣をアルミの容器に入れて、専用の機械で上から押しはちみつを絞る。コツがあるがジョセフさん(左)の手にかかれればお手のもの

**「千の丘の国」の背後にある歴史**  
アフリカに「千の丘の国」と呼ばれる国がある。2月初旬、真冬の日本から逃げ出すかのように向かった先は、中部アフリカの内陸国ルワンダ。空港から首都キガリの市街地への道すがら、車窓に映るのは、丘、丘、丘…。その上に広がる空は、あまりにも青く、美しい。

そのすべてが、誰もが抱くであろうイメージと違っていた。そう、あの悲しい歴史を知っている人ならば。1994年、ツチ族とフツ族の対立から火が付いたジェノサイド(大量虐殺)。約3カ月で罪なく奪われた命は、100万を超えるとも言われる。しかし、そんな血にまみれた歴史からは想像できないほど、さわやかな風がほおをなでる。雨期と乾期のはさま、日中は日差しが強いが、朝晩は半そででは肌寒い。首都を後にし、ひたすら北東に

車を走らせる。真つすぐに延びる道路はきれいに整備されており、アフリカのイメージを覆す。しかし、人々の悲しみが消えたわけではない。これまで約20年、政府は懸命に復興に取り組んできたが、地方部での生活は決して豊かとは言えない。

**はちみつ作りで貧困から脱却**  
「おはようございます!今日はよろしくお願います!」  
朝9時、首都から約3時間、カラングジに着くと、青年海外協力隊員の吉田晃輔さんがすがすがしい笑顔で迎えてくれた。この地で暮らし始めてもうすぐ2年。村落開発普及員である彼の任務は、はちみつ作りを通じた生計向上だ。

「養蜂農家を回ってみると、それまでは自分たちの消費分だけを作っていました。でも、地域の産業としてのポテンシャルは十分にあると感じたんです」。吉田さんは農業省などに掛け合い、協同組合を設立することに。農家の人々を巻き込み、みんなではちみつ作りに取り組みることになった。

日本では、大手自動車メーカーの営業をしていた吉田さん。東京のオフィスで、夜遅くまで働く毎日。そんな彼が、休職してまで参加したかったのが協力隊だった。「BOPビジネス」に興味があ

あって、いずれ開発途上国での業務に挑戦してみたかったんです。そのために、まずは現地を知らなければと。入社2年目、意を決して上司に相談すると、「がんばってこい!」と背中を押された。

草むらに入っていくと、10人くらいだろうか、村人たちが集まっていた。この日はみんなでハチの巣箱作り。竹を編んでかごを作り、牛ふんを塗って固めていく。「うないなもの尽くし」ですが、工夫すればどうにかなるものです」と吉田さんは笑う。

採れたてのハチの巣をギュッと絞ると、透き通った茶色の液体がとろりと出てきた。味見させ



協同組合のメンバーがハチの巣箱の状態を交替で確認。みんなでのづくりに取り組む喜びがはぐくまれている



1個2,000ルワンダ・フラン(約300円)、純度100%のアカゲラハニー。パッケージはデザインが得意な協力隊員が担当

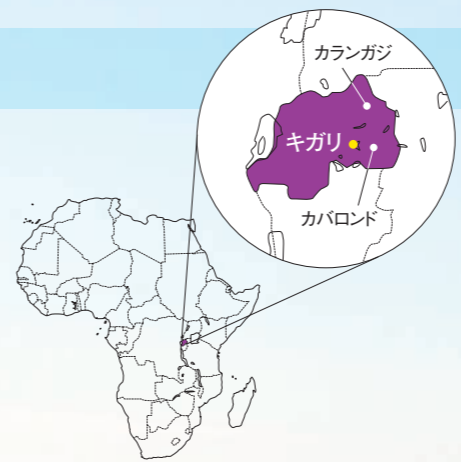
※1年間3,000ドル以下で暮らす貧困層(Base of the Pyramid: BOP)を対象に、開発課題(所得向上・教育水準の向上・安全な水の普及など)の解決に向けたビジネス。

住民たちと養蜂用の巣箱作り。吉田さんの人柄と熱意が、村の人々を笑顔にしている



写真=久野武志(カメラマン)

ルワンダ  
from **RWANDA**  
青年海外協力隊



人々と共に生きる

中部アフリカの内陸国ルワンダ。1994年、この地を襲ったジェノサイドの悲劇は人々の心に深い傷を残した。その歴史を乗り越え、懸命に生きる人たちを支える青年海外協力隊。現地を根を下ろして活動する日本の若者たち取材した。



各地に低い丘が連なり、「アフリカのスイス」と呼ばれることも



[上]子どもたちにもヒアリング。住民の生活に入り込むことで、彼らの本当のニーズが分かる  
[右]水源の水は病院に戻って水質を検査し、コミュニティの衛生対策に生かす  
[左]水くみは共同作業。水のある場所には人が集まる

「あれ、おかしいぞ!」  
井戸を掃除していた一人からそんな声が上がった。どうやら、このハンドポンプも調子が悪いようだが、修理するにも部品が足りない。すると、櫻井さんは誰かに電話をかけ始めた。相手は、別の地域で活動する協力隊員。余っている部品を貸してもらえらるることになった。ルワンダ国内の、水の防衛隊は8人。「月1回は集まって情報は共有しています」と櫻井さん。困った時は助け合い、悩んだ時は励まし合う。数人で学校を巡回し、手洗いなどの衛生指導もしている。

※2008年の「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」で日本が表明したアフリカの水分野の支援方針。村落給水、水道管理などの専門家やボランティアの派遣を通じて、水問題の解決を目指す。



川の泥水を生活用水として使うことも。感染症の影響が心配だ

スセンターの職員に質問を投げ掛けている。彼女も、水の防衛隊の一人。地域の病院や村を回り、水へのアクセス、衛生管理の状況について調べている。不衛生な水を原因とする病気をゼロにすること。それが彼女の目標だ。

「以前勤めていた会社に協力隊経験者がいて、実はずっとあこがれていたんです」。退職して大学に入り直し、保健師の資格を取得した。その熱意はどこからくるのか。すべては、途上国の人の役に立ちたいという思いからだという。そして今、彼女はその夢を実現し、ルワンダの農村で汗を流しているのだ。

「家は毎日2回は必ずここに来るよ」  
真つすぐな瞳で答える子どもたちに、黒川さんの顔が曇る。「学校にも行けず、不衛生な水が原因で病気になる子もいる。その状況を少しでも改善したいんです」。水源の水はペットボトルに詰めて持ち帰り、活動拠点の病院で成分を検査する。地道な取り組みだが、この町の人々の生活が少しでも良くなればと、黒川さんは精一杯思いを込める。

「先月、下痢症の患者さんほどたくさんいましたか?」  
「衛生教育はどのように実施していますか?」  
昼下がり、黒川美央隊員がヘル



小学校でハンドポンプの修理方法を指導する櫻井さん。子どもが体重をかけてポンプを押すと、負荷がかかって壊れやすくなってしまふ

「何をやっているの?」。そう尋ねると、「家のお手伝いで水をくみに来たの」と女の子が答えてくれた。小さな手が抱えている黄色のタンクは、ずっしりと重い。農村部ではまだまだ多くの人が井戸水に依存した生活。5キロ以上の道のりを、一日2〜3回往復することもあるという。その働き手のほとんどが、彼女のように遊び盛りの子どもたちだ。

「4キロ!毎日2回は必ずここに来るよ」  
真つすぐな瞳で答える子どもたちに、黒川さんの顔が曇る。「学校にも行けず、不衛生な水が原因で病気になる子もいる。その状況を少しでも改善したいんです」。水源の水はペットボトルに詰めて持ち帰り、活動拠点の病院で成分を検査する。地道な取り組みだが、この町の人々の生活が少しでも良くなればと、黒川さんは精一杯思いを込める。

「先月、下痢症の患者さんほどたくさんいましたか?」  
「衛生教育はどのように実施していますか?」  
昼下がり、黒川美央隊員がヘル

「命の水を守るため  
水の防衛隊が活動中」

「命の水を守るため  
水の防衛隊が活動中」

「命の水を守るため  
水の防衛隊が活動中」

「命の水を守るため  
水の防衛隊が活動中」



水管理組合のメンバーと協力してハンドポンプを修理

一滴の水は命の源。人々が安全な水にアクセスできるよう、アフリカ各国で「水の防衛隊」が活動中だ